国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜講演＞「新しい女」の誕生とことば

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 千草 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000927

講演

「新しい女」の誕生とことば

小林 千草（東海大学特任教授）

はじめに

清水先生のお話が非常にすっきりとみなさまの頭にはいっていったところで申し訳ございませんが、幕末にまで頭を戻していただきます。維新後の東京市の市民のことばと、それに先んずる江戸の活気がある町方（まちかた）、町人たちのことばからはいっていきたいと思います。

日本語の歴史をながめますと、当たり前のことですが、ことばは時代を創り、また、時代がことばを創っております。どの時代をとっても日本語が大きく変化したときは、歴史が動いております。

今回のテーマになっております近代日本語の場合は、社会体制上、女性が初めて注目されてきたのが明治だから〝新しい女〟（〝新しい男〟と言われないのは男はずっと中心を占めてきたから）と言われるのでしょうが、明治近代国家を支える男性たる主人公を描いている夏目漱石の『三四郎』（一九〇八年）の三四郎、『明暗』（一九一六年）の津田と互角に対峙する（会話を繰り広げる・コミュニケーションする）ヒロインの美禰子やお延を「新しい女」とみなし、彼女たちのことばづかい（物言い）がいかにして手に入れられたものか、文末の「～だわ」「～ですわ」の「わ」に焦点を絞って、日本語の歴史という立場で検証しようと思います。

ここでいう「わ」は、今のアニメや吹き替えで、どこの国の人でも女性が出てきた会話文末に「わ」が使われている、つまりこの人が女性だと教えてくれているマーカーのような「わ」ではありません。すでにマーカーと化した文末の「わ」をご覧になったフェミニズム論の方々は、男性が創った女性像に合うことばを使わされていると、スパっと論じきられました。しかし、日本語の歴史を、まさに現場の警察官の聞き込み同様、いろいろと資料を調べておりますと、女性が「わ」を獲得するまでは大変なのです。ようやく獲得したことばを、美禰子やお延は使っているのです。その当時、非常に斬新だったわけです。たし

小林 千草

東京教育大学大学院文学研究科修士課程修了。博士（文学）。新村出賞受賞。
東海大学教授を経て、2012年より現職。
表現論の実践として、 千 草子のペンネームで作家活動も行う。
専門分野：日本語学（中世を基盤とする日本語の歴史・女ことば・表現論）

かに、男の人も、新しい女性で「わ」を使ってはっきり自分の物言いができるのを「素敵だなぁ」と思った、素敵だと思ってくれたから、どんどん使うし、その下の若い方々も真似ていきました。若い方は現代の若者、若いお嬢さんたちと同じです。「いやだわ、よくってよ」など、「わ」を他の表現と組み合わせて、当時の年配の男性方に「なんということばづかいだ」と言われるようなことばも創っていきます。そのどんどん使用の広がる一歩手前の「わ」について、今日お話ししたいと思います。その試みのなかで、「近代の日本語はこうしてできた」という多面性を持つタイトルの一面について、結果論ではなくプロセスを描き出すことができればと考えています。

一　江戸後期～幕末期の女ことば
その一：『浮世風呂』より

明治期の新しい女に直接つながるのは、江戸市民でも知識層であろうということで見ていきます。当時はテープレコーダー、ビデオがありませんので、できるだけ会話を忠実に復元していると思われる『浮世風呂』（一八〇九～一三年）から拾っていきます。『浮世風呂』で、かも子さんとけり子さんのように『万葉集』を読むようなちょっと知識が高い方々は次のように話しています。

けり子「ハイ、見ました。中々手際な事でござります。しかし疑わしい事は、あの頃にはまだひらけぬ古言などが今の如ひらけて、つかひざまに誤のない所を見ましては、校合者の添削なども少しは有たかと存ぜられますよ」

かも子「何にいたせ、女子であの位な文者は珍らしうござります。先日も外で消息文を見ましたが、いにしへぶりのかきざまは、手に入った物でございます」

けり子「さようでござります。何ぞ著述があったでござりましょうネ」（三編下）

「ますよ」が使われています。また、「ございます」は江戸的です。そして、終助詞「よ」「ネ」など持ちかけのことばが目立ちますが、「わ」は使われておりません。もう少し、なんと言うんでしょうか、けり子・かも子より知的会話を抜くと、中流階級の日常会話として次のようなものが耳にはいります。

▲「さようさ。今年は余寒が強うございまして、あのまア雪を御覧じましな」

●「さようでございます。雪の所為かして兎角病人が多うございますよ」

▲「さやうさ。いつも寒明にはちつとづゝ病ひ勝でございます。シタガおまへさんはいつも御丈夫でようございます」

●「イヱモウ、是でも病身でございますがネ、（略）至極達者になりました」

▲「ハイ、それはお仕合せでございます。あの延寿丹は（略）名高い薬でございますのさ。あれは一丁目でございましたっけ。私も暑寒にはたべますのさ」（三編上）

ここで▲は、六十ぢかきばあさま、●は、それより年下の品の良い奥様です。

六十が〝ばあさま〟だったら私は何になるのだろうと思いますが、六十ぢかきばあさまと、それより年下の品の良い奥様の会話です。

江戸ことばとして、男女とも特徴的な「さ」を用いているのが目立ちます。明治、大正、昭和もその使用が耳に立つくらいすごかった。それで、「さ」を取り除こうという小・中学校教育活動（ネ・サ・ヨ運動）がなされたくらいです。

「ます」「ございます」の敬語をふんだんに使っているのは、けり子・かも子と同じです（ただし、けり子・かも子は、さらに古風で重々しい「ござります」を使っている）。では「わ」はどこに隠れているのか、同じお風呂に来ているいろいろな階層の女たちを見てみる必要があります。

さらに登場人物の幅を広げて、やっと主人のお許しをもらってお風呂に来てリラックスしている人々の会話を見ていきましょう。

おべか「お猿どん、今のをきいたか」

おさる「ウウ、聞たは」

「は」が出てきています。しかしこれは、明治期のお嬢様方が使う「わ」ではなく、吐き捨てるような「は」です。でも、これこそ元の「わ」です。中世からの「わ」なんです。今も大阪では続けられています。京都でも若干耳にしますが中世以来続けられていた語気の強い吐き捨てるような「わ」です。「俺しらんワ」「うち知らんワ」など言う「わ」です。

おべか「よくしゃべくる婆さんだの」

おさる「さうさ婆はあたりめへだが、金溜屋のおかみさんよ。人品の能風をしてとんだ目口乾だの。遊ばせの、入らツしゃいのと、たべつけねへ言語をしてもお里がしれらア。……」

ここで「遊ばせ」というのは「なになに遊ばせ」「ごめん遊ばせ」です。明治になって上流家庭の女性たちに使われる「遊ばせことば」の「遊ばせ」です。「入らツしゃい」「いらっしゃいまし」、今「いらっしゃい」はまだ使っておりますが、そういうことばです。そして、「たべつけねへ言語をしてもお里がしれらア。あれだから奉公人が居着ねへはな」では、「はな」（ワナ）というかたちで「な」と合体して出てきております。

おさる「マア、ためしてみな、去年まで居たお三どんは、六十四文ばかり置いて来た人だから久しく辛抱もしたらうが、あの跡で幾人出たとおもふ。たった十月ばかりの間に丁度五人かはったぜ」

おべか「どうせ又、あのてやいの気にいらうとすれば直さま労咳だ」

おさる「しれた事さ。（略）気散じに暮す方が徳さ。針を持うと持めへとこつちの量見づくだ。縫物が出来ねへて打遣られた女もねへもんだはな」（三編上）

「はな」（ワナ）が出てきています。吐き捨てるような「は」と、それからちょっと持ちかけるような「な」が合体したものが見つけられました。

「ウウ、聞いたは」の「は」は、驚いたり、憤慨したりするときに下降調で発される強い語気を持ったもので、これは中世から男女区別なく認められる表現です。「居着ねへはな」「ねへもんだはな」の「はな」

（発音としては「ワナ」）は、自分の判断を相手に持ちかける気持ちを出すために「な」を添えたもので、完全に吐き捨てるような調子ではありえません。ここでは少し変貌していますね。「な」がつけられた。

男女共用の「居着けねへぜ」「ねへもんだぜ」の「ぜ」よりも、やわらかさがあります。「ます」「ございます」の敬語を使わず、活用語の言い切りや「だ」をそのまま使う下働きの若い彼女たちにとっても、「～は」と言うのは、やはり強すぎるので、「ワナ」でやわらかさを出していたらしく、「その方がさつぱりとして能はな」「二朱と六百いくらか足したはな」というのは、相手への歩み寄りを表しております。

中世の「は」（ワ）がさまざまなバリエーションを江戸時代に起こして、「ワイ」「ワノ」「ワナ」「ワイナ」「ワイノ」になります。特に「ワイナ」「ワイノ」の歴史は古く、近世前期の近松浄瑠璃作品の女ことば、作品上、遊女が多く、花魁にも認められますから、そういうことばをことさら口真似する以外は、江戸の女たちは使わないわけです。まして、「ワイナ」や「ワイノ」がそうなっているならば、明治の〝新しい女〟になろうとする女たちは、一旦遊女のことばづかいとして強く染め上ったことばを避けて、しかし、「わ」の持つ自己主張性を生かそうと、「わ」を再生させることにしました。付加されていた「ナ」（「イナ」）「ノ」（「イノ」）をとってことばを創っていこうとすると考えられます。

二　江戸後期～幕末期の女ことば　その二：『春色梅児譽美』より

『浮世風呂』から二〇年後の作品で、当時の言語世界を見てみます。『春色梅児譽美』（一八三一～三三年刊行）は、為永春水（一七九〇～一八四四）の作です。ただし、これは遊里の世界です。幕末から明治期まで、遊里の世界の資料が多く、普通のお嬢さん方の資料がないのが致命的ですが、ここに一つの言語事実があるという立場をこれからとっていきます。

この作品は昔の吉原ではなく、深川の新吉原です。深川周辺の花魁此糸さんとお長さんです。お長さんは置屋の娘で、多少遊里に足を突っ込んでいますが、町屋のお嬢さんと似た性格を持っております。今は自分の生家が没落して、身につけたお稽古事の娘浄瑠璃（義太夫）なんかで身を立てております。この身を立てる――自立する女であることも、ちょっと頭にとめておきたいと思います。一方の此糸さんは「はネ」（ワネ）という言葉を使っています。

此「ナニサお案事でない。どふかして法をかいて爰を身抜をさせもふす、手段もまたありませうはネ。かならず（略）用を足なんしヨ。（略）往なんしヨ。かならず案事なんすなエ」　此「しげりやなんだ其口は。お長さん早く下へ往なんしヨ。何もこわいことはおざんせんはネ」（初編二）

その「はネ」が、この時代、おべかさんたちの「わな」と同じように使われていると同時に、このセリフのあいだにはいった、

長「ハイおありがたふ夫じやア下に往ますヨ」

の「よ」を使った一言がとても注目されます。此糸さんとお長さんが二階で話していたので、下の階段を上がってきた遊里の世界の女の子――禿が、

「ヲヤお長さん今下の方でたいそふ呼でいますヨ。はやく裏梯子から

下りてお出なまし」

と声をかけますが、この「なまし」は、遊里ことばです。つづいて、禿は、

「アノ意地悪根性がおそろしい顔をしておまはんを呼ますは。顔が憎いヨ」

と言います。ここで、「呼びますは」と言っていますが、今、私が言った「は」は、現代の「わ」に近づけて、ちょっと音を上げたかもしれません。けっして吐き捨てるような「は」ではありません。なぜなら、「ます」がついています。「ます」と言ったとき、「は」って、吐き捨てるように言えませんから、どうしてもやわらかいトーンがついたと思います。このトーン（音調・抑揚）が、のちのち明治にはいって美禰子さんやお延さんが使う「わ」になっていく。このあと三〇年ほどのあいだに高めにやさしげに発されるトーンになっていくのだと思います。ただし、その音声資料は残されてないのが残念です。

他にも例がございます。侠気の女髪結い小梅のお由さんはもと遊女です。やっぱり遊女が絡んできますが、この人は、〝おあ姉さん〟みたいに気風（キップ）がよいのです。自立して髪結いとして働いています。その人が、愛し慕い続けた籐兵衛さんに、

由「そふやさしく被仰と真に嬉しく思ひますけれど、どふもおまへさん方に限らず、男子達（とのがた）といふものは浮薄（うわき）なものだから、いとどおもひがますやうなことが、この末ともに有ふかと案じられますは」（三篇九）

と、やはり「ます」をともなった「は」を使っています。私は、「わ」って言いましたが、私の言う「わ」より、もう少し固い部分があったかもしれません。愛する人に対して、自分の心を切々と訴えつつ丁寧の「ます」を使っています。禿より年長で、髪結いという自立した江戸の職業婦人の使用した過渡期の「〜わ」として記憶にとどめたいと思います。

三　明治前期の女ことば『当世書生気質』『辰巳巷談』より

明治期にはいり、坪内逍遥著『当世書生気質（とうせいしょせいかたぎ）』（一八八五〜八六年）と泉鏡花著『辰巳巷談』（一八九八年）からお話しします。

『当世書生気質』の例も遊里の女性絡みで、資料的には偏るようで困るのですが、当時、家が没落し女性が自分の身を立てようと思うと、芸子さんになるとか、遊里に近い所で稼がざるをえなかったという社会的事情を私は考えていかなければならないと思います。そういう世界で、元はいいところのお嬢様が苦労して自活して自分の意思を、混乱する明治の社会で自分の考えを主張するときに、明治新政府の長州や薩摩、あるいは山形から来た官吏の方々と出会われ、そこに恋が生じると正式な奥様として家にはいり、そこが明治の新しいお嬢様方のご家庭になっていきました。これはドラマ（物語）ではなく、現実に実

数も多かったと思います。『当世書生気質』の明治一八年第一回における数寄屋橋か新橋あたりの芸妓田の次と、姉さん格の園の会話を見てみます。

園「ヘン、いやに老こんだナ。田の次はどうだ」

田の次「姉さんがやらなけりやア、妾だつて否ですワ。男三人に女一人では、どうせ叶やアしませんもの」

あらぬ想像はなさらないでくださいね。同席するその三人の客は、銀行頭取風（四三、四歳）、銀行役員風（三五、六歳）、青年弁護士（二六、七歳）であり、上客相手の芸妓です。そうそうたる当時の社会を担う人々に対して言っています。ですから、田の次さんの「ワ」は、『三四郎』のヒロイン美禰子さんのと同じではないかと思います。

そういう時代にあっても、田の次さんと同じような年代でもう少し遊里に近い方だと、「ワナ」と同時に「ワ」を使っています。その例が、次の新造お秀と娼妓顔鳥の会話です。

秀「モシおいらん。吉さんがけへるけへるとおいひなすッて、しやうがありませんヨ。」

顔「よいヨ、お帰りなさるならお帰し申すがいゝわナ。あれほど訳をいつても不解で、お腹をおたちなさるんだから仕方ないワ。」（第七回）

江戸風な「わナ」が出てきます。こうなると、私が「ワ」ってちょっとやわらかみをつけて今読んだものよりも、ぶっきらぼうだったかもしれません。なにぶん録音資料がないので……。「わナ」と「ワ」が同居している例です。そのような状況になりました。

もう一つの『辰巳巷談』（明治三一（一八九八）年）は、洲崎の遊女胡蝶の悲劇を扱うとても面白い小説ですが、胡蝶さんは、「鼎さんが、ぶたれるんだわ、私や何うしよう」「だッて、逢いたいわ！」と、言っております。このように、「だ」とか、言い切りの「たい」について、「です」「ます」にはついていませんが、これは、吐き捨てるような「わ」ではなく、相手に、ほんとに訴えたい「わ」になっていると思います。

今、「わ」を一つとって見てきましたが、資料の偏りがあると言われれば、これ以上進めませんが、でも当時、男性と伍して女性がことばを言えた（コミュニケーション出来た）のは、遊里の世界と、遊里の世界の周辺です。ですから、私はむしろ居直って、ここに女性の主張する場があるので、会話文として反映されていると逆に言いたいわけです。

さきほどから自立するという語を使っておりますが、髪結いさんも自立しています。田の次さんも家が没落して、後に主人公と結婚していくのでしょうが、芸妓さん見習いみたいなことをしながら自立しようとしています。遊女たちは、生活のため身売りをされた娘が多くいました。もともと貧しい家の娘のほかに、没落した豪商、医師、武家の娘も多く、そのうち幾人かは、史実の伝えるとおり、幕末から明治

にかけて、明治新政府の要人たちの妻となり明治の上流社会を担いました。芸妓も、家の没落により芸は身を助けるの諺通り自活の道として選ばれました。したがって、彼女たちが生家で使い、遊郭、あるいは、芸妓置屋で使っていたことばは、物言いのさらなる洗練さ（特に、最終語尾のやわらかな上昇化）が加われば、融合した状態で世間に通用していったと考えられます。「〜わ」も「〜よ」「〜こと」「〜もの」とともに、お嬢様が若者ことばとして上・中流階級の家々で使い、さらに、その娘である〝お嬢様〟に使われ、お嬢様は若者ことばとして、さらに「しらないわ。よくってよ」などという〝自分たちのあるべき姿〟に見合った表現を生み出していったのです。

四　言文一致運動の頃『浮雲』の場合

ここで、時代的には先に話したことと重なります。さきほどの清水先生のお話にもでた「言文一致運動」は、この「わ」には直接かかわりませんが、二葉亭四迷（一八六四〜一九〇九）の言文一致作品である『浮雲』（明治二〇（一八八七）年）に「わ」が使われています。お勢さんが母親のお政とかわす一連の会話から「わ」を見つけ出すことができます。

「だけれども本田さんハ学問ハ出来ないやうだワ」

別のちょっとおいて、

「それは不運だから仕様がないワ」と言っております。これもおそらく、私は「わ」って丸みを帯びて言いましたが、そのような「わ」だったと思います。

この会話でお母さんのお政さんは、娘に対して「わ」は使っていません。お母さんは当然幕末に生まれています。しかし、本田昇という官吏と話すときは、「わ」を使っています。

「虚言ぢやないワ真実だワ（略）此様な邪見な子を持ツたかと思ふとシミジミ悲しくなりますワ」

と、明治の山の手ことば、つまり、自分の品格を保つ、できるだけぶっきらぼうにではなくて、やわらかい言い方をしたいと思ったときに、「わ」が取り入れられます。今もあることですね。娘の言語状態に母親が合わすことがあるということです。本田に同情を得ようとしているのです。娘の悪口を言いつつ、コミュニケーション上、娘と結婚させたい本田にすりよろうとする母親が使っております。

五　新しい女の誕生、漱石作品の女たち

ちょっとスペースがなくてレジュメにはあげることができませんでしたが、私がすでに発表しております『女ことばはどこへ消えたか？』（光文社新書）と『『明暗』夫婦の言語力学』（東海教育研究所）のなかから読み上げていきます。前者には、『三四郎』（明治四一（一九〇八）年）を中心とするいくつかの漱石作品が、後者では『明暗』（大正五（一九一六）年）が扱われています。

漱石の作品を若い頃からお読みになられている年代の方々が大勢おられるので、どうぞ思い出しつつお聞きください。とてもよい場面です。一度めは帝大構内の池で、二度めは病院ですれちがった三四郎と美禰子さんが、広田先生の引っ越しの手伝いで初めて会います。そし

て、掃除がある程度終わって、二階で窓を見ながら、青い空に「雲が浮いている」のを共に見つめるというとてもロマンチックな場面です。

そこで、三四郎さんが美禰子さんの許婚であると思われる野々宮さんの受け売りで、ちょっと科学的なことを言うと、「あらそう」と美禰子さんは言うのですが、「雪じゃつまらないわね」と、否定を許さぬ調子で言い、「雲は雲でなくっちゃいけないわ」と言っているんです。これは彼女の三四郎に対する本当の心情の吐露になっています。つまり、自分の返事次第によっては、雲が雪のもとなんていった野々宮さんへの心情の近よりを表明することになるから、ここで絶対そうしたくない。一生懸命考えるわけです。そのときに、「雲は雲でなくっちゃいけない」と言う彼女の三四郎に対する恋の告白が生まれた。そのとき、「わ」をつけております。女だから文末に「わ」をつけておくなどという「わ」ではありません。ものすごく選んだ末の「わ」です。そのきっぱりとした主張を汲んで、三四郎は「なぜです」って聞いています。

「何故でも、雲は雲でなくつちゃ不可ないわ」。かうして遠くから眺めてゐる甲斐がないぢやありませんか」

美禰子は、はっきり理論の元に使っております。女だから「わ」を入れたわけじゃないのです。『三四郎』全編を見ても、物語展開上で重要な場にしか使われていません。

『三四郎』をしっかり読む前までは、漱石は会話に関してはステレオタイプだと言われていたので、私も「そうかなぁ」と思っていました。とんでもない。やっぱりよく漱石は観察しています。会話だけステレオタイプにしたなんてありえません。よく観察し、登場人物のことばとして選んできているなと思います。

別の場面です。グループでピクニックにいきます。三四郎の友人の与次郎――寅さんみたいな役回りの男性が「バスケットを車夫に持たせて来たのだろう」と聞くと、美禰子は「車夫は今日は使に出ました。女だつて此位なものは持てますわ」と答えています。

自分が女性として男性に伍して日常を動いているというアピールをしたい。これを誰に聞かせたいのかと言うと、与次郎と共にいる三四郎にです。そして、「どうです里見さん、あなたの所へでも食客に置いて呉れませんか」と、自分の妹を置いてくれないかと野々宮に言われたとき、「何時でも置いて上げますわ」って言うんです。これ、「何時でも置いて上げます」で切らないで「わ」を入れたのは、こう言うことによって、三四郎がどう反応してくるか、すごく見ているわけですね。

一つひとつ見ていけば、名場面名場面に全部「わ」が使われております。でも、たとえば、今話しました野々宮さんの妹は女学生ですから、当時の流行語として「わ」を使ったところもあります。それは読んで文脈から見ていくと、ここはその乗りで使っているなと、識別可能な範囲です。

三四郎はこれくらいにしておきます。

『明暗』の旦那さんの津田さん、気むずかしい人です。性格的には漱石をモデルにしたかと思いますが、キャラクターは背が高くて、美男子という設定になっています。そういう外見的設定は、漱石の自画像に近いとやりにくいから、自分と逆のキャラクターを入れこんだ感じがします。

京都に住んでいるお父さんからの手紙を津田さんは待っていたんです。そして、津田さんが、

「御父さんからまだ手紙は来なかったかね」
と聞いたんです。それに対して、奥さんのお延さんは、
「いいえ来れば何時の通り御机の上に載せて置きますわ」
と言っています。この「わ」は、「あなたそんなこと言うけど、私は絶対にちゃんと郵便箱のなかを見ている」「郵便箱になかったんだから机に載せることもできない！」という、険しい物言いであり、女らしいやわらかさだけではないんです。「これから議論になってもかまわないわよ」っていう感じの「わ」を使っております。

この二人の夫婦の会話は険悪なものが多い。こんな陰険な夫婦はしんどいだろうなと思うくらいです。旦那さんが遅く帰ってきたとき、鍵を閉めていたから怒ったんですね。今とちょっと違います。今、合い鍵を持っていますから、すぐはいれますが、当時はそうじゃない。

「待ってたものがなんで門なんか締めるんだ。物騒だからかね」
「いいえ。――あたし門なんか締めやしないわ」
「だって現に締まっていたじゃないか」

「時が昨夕締めっ放しにしたまんまなのよ、きっと。いやな人」
「時」というのは女中さんです。
「時はどうしたい」
「どうしたい」は、江戸ことばです。江戸の名残りがあります。「どうしたい」って旦那さんが聞くと、お延さんは
「もう先刻寝かしてやったわ」
と応じます。「私が寝かしたんだから、これ以上、あなたの権限で起こす必要はない！」というニュアンスで文末に「わ」を使った。夫への最後通告です。そのような強さを持つ「わ」です。そのような「わ」が、自己主張するには便利でよいとしてどんどん使われ、その自己主張する女たちを、いいなぁと思い始めた男性たちの言語環境があります。新しい女として、自分の意見をはっきり言える女たちを、いいなぁって持ち上げる男性の眼――それが、「～わ」を助長させたとすると、そこからはフェミニズム論が扱う問題に踏み込んでいくことになるでしょう。

「～わ」は、どんどん使われます。大正、大正一五年間は短いですよね。『明暗』は大正にはいってから発表されています。そして、昭和後期になると、もうマーカーとしての機能しかありません。日常で使う私の「わ」はそうです。私はまだ、なんとなく身にしみてしまった「わ」を使います。ところが、現代の若い人たちは――私も三〇年ぐらい前から気づいておりますが、「わ」を使わない。「よ」で十分なんです。「そうだよ」「ここにありますよ」と「よ」で事足りるのです。主張したいときも、「よ」は便利です。いろいろなところ、命令形にも使えますから便利で、もうほとんど「よ」でまかなっています。「わ」をもし現

代のお嬢さんが使っていたとしたら、探しているものが見つかったら、「ここにあったわ」（ワは下降調）、これは先祖返りをしているのです。

おわりに

中世期の、たとえば『史記抄』の「スハヨイハ」、『天草版平家物語』の「ことができたワ」は、気づきの「わ」です。現代の「わ」は、それに戻っています。そして別途、アニメーションとか吹き替えの女性のセリフや、〝お姉ことば〟として、現代の若い方々が捨てた《やさしいトーンを持つ女らしい「わ」》は生き残ることと思います。

今言ったのは、あくまでも、東京ことばの「わ」です。関西では、ずっと「わ」は男女ともに使われています。大阪出身の方は、女らしい「わ」はあんまりピンとこない方もいらっしゃると思います。

以上、「〜わ」という小さな小さな表現――前後の先生たちのテーマのなかでも、もっとも小さなものを扱ったかと思いますが、近代日本語の一つの表現が、どのように出来上がって、どう捨てられていったかというのをお感じいただければありがたいと思います。ご清聴ありがとうございました。